

高齢者が長期入院する病院の「療養ベッド」について、厚労省の有識者検討会が1月15日、半数超にあたる14.3万床を廃止し、転換先として、新たに3種類の施設を創設する案をまとめた。

新施設は、病院や診療所を併設した「医療外付け型」と、施設内に医師が常駐する「医療内包型」だ。「内包型」は、患者の医療必要度に応じて、人員体制の異なる2タイプに分けられる。

医療病床は、医療保険を使う「医療型」（20.8万床）と、介護保険を使う「介護型」（6.3万床）がある。医療費削減のため、医療型の一部と介護型は、2017年度末の廃止が決まっていた。だが、ある程度の医療が必要な高齢患者が多く、介護施設への転換が進んでいなかった。既存の介護施設より医療体制が手厚い3施設を創設することで、選択肢を増やし、転換を促すという。（2016/01/16 読売新聞から）